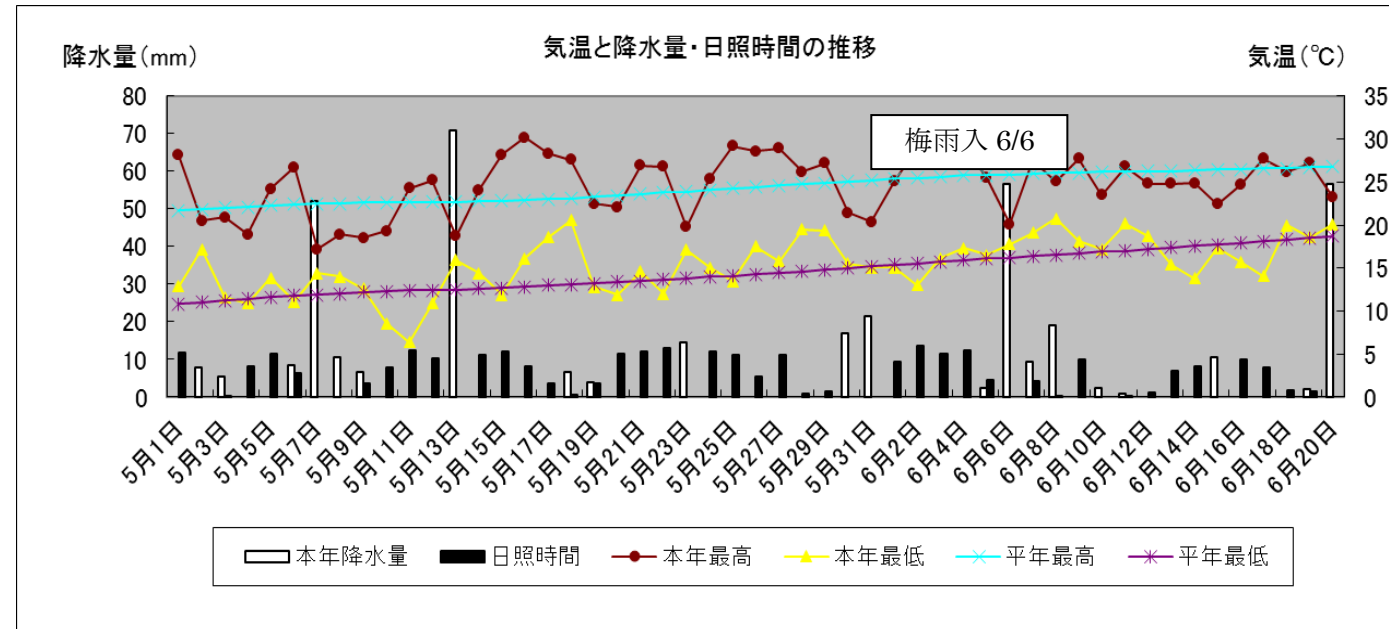


I、水稻生育概況



生育概要

5月の天候は全般的に安定しており、最低、最高気温は共に平年より高く推移しています。日照時間は平年よりやや多く、降水量については、まとまった雨が降った日もあり、平年よりやや多くなっています。

本年の水稻は、田植後気温が高く推移したため活着は良好であり、圃場によっては茎数が多くなっている所も見受けられます。

今年は、6月6日に近畿地方で梅雨入りをしました。梅雨入り後は雨の日が多く、降水量は平年よりやや多いとなっています。そのため、生育が旺盛で過繁茂な圃場については、いもち病などの病害に注意が必要です。

中干し作業については、7月に入りますと幼穂形成期に入り水稻は水を今まで以上に必要としますので6月末までには中干しを完了していただき、中干し作業をまだ実施していない圃場については、早急の実施してください。

また、今年についても雑草の発生（ヒエ、クログワイ、オモダカなど）が多い圃場が見受けられます。そういった圃場については、後期除草剤などを散布し雑草防除に心掛けましょう。

近畿地方の今後の気象予想では、7月前半は、平年に比べ曇りや雨の日が多く、後半は平年に比べて晴れの日が多い予報となっています。今後の気象によっては、高温や急な雷雨・台風など、水稻の生育に障害を与えるような気象状況になる可能性もありますので注意が必要です。

☆7月の品質向上への取組みと管理のポイント

- 生育に応じた適期の穂肥施用と出穂前後の水管理
- 水稻病虫害の早期発見、早期対策
- 水稻一斉防除（カメムシ対策）と合せた畦畔の草刈の実施

1、穂肥（良品質米への総仕上げ！穂肥を適期施用して、目指せ1等米！）

●穂肥の効果

穂肥は稲体中の窒素濃度を高め、穂を大きくして籾数を増やしたり、籾の稔実を良くするため

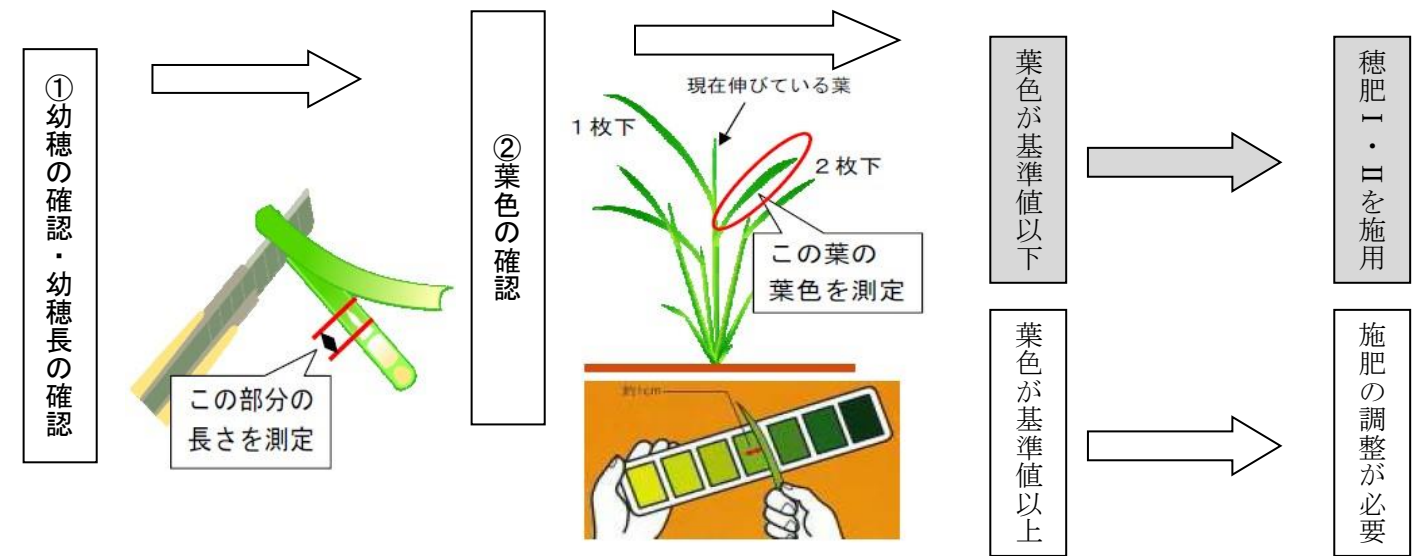
に窒素、カリ肥料を補給する為の肥料です。品種や田植え時期、圃場の状態や、稲の生育状況などに応じて、適期に適正な量を施用することが重要です。

●穂肥のポイント！

穂肥の施用で重要なのは施用の時期です。穂肥の施用が早すぎると、稲はまだ葉や茎を展開する過程（栄養生長）にあるため施用した肥料が茎や葉を作るのに使われ、特に茎が伸びすぎて倒伏したり、籾の稔実が悪くなったりして減収してしまいます。また、遅すぎると穂や籾の栄養が不足し収量があがらなくなり、食味も悪くなってしまいます。

適切に穂肥を施用するためには、適正な稲の生育診断が不可欠です。

●穂肥適期の判断方法



品 種	田植時期	穂肥Ⅰ		穂肥Ⅱ		出穂期(予想)	穂肥Ⅰの適期	穂肥Ⅰ適期の幼穂長	葉色からみる穂肥Ⅰの目安
		時期	施用量	時期	施用量				
コシヒカリ	5/5	7/9	15	7/16～19	15	7/27	出穂18日前	5～10mm	3.5以下で施用
キヌヒカリ	5/5	7/3	20	7/10～13	20	7/28	出穂25日前	1～2mm	4.5以下で施用
日本晴	5/5	7/12～14	30	—	—	8/6	出穂25日前	1～2mm	4.0以下で施用
秋の詩	5/5	7/16～18	20	7/23～25	15	8/8	出穂21日前	3～4mm	4.0以下で施用
滋賀羽二重糯	5/5	7/25	15	8/1	15	8/12	出穂18日前	5～10mm	3.5以下で施用

※基肥1回タイプの肥料（楽しょう君）を使用した場合は穂肥の施用は不要です。

※豆跡栽培で基肥、追肥を散布されていない場合は、水稻の栄養状態を確認し調整して施用しましょう。

●穂肥2回目の施用時期

早生品種では登熟期が高温になるため、水稻の夜間呼吸が増大することによって栄養不足になりやすく、特に登熟期後半の栄養不足による未熟粒や乳白粒の発生が多くなっています。そのため、早生品種については生育後半の栄養不足を解消するため、穂肥Ⅰより1週間後（コシヒカリは出穂11日前、キヌヒカリでは出穂18日前）から10日後に施用するようにしてください。

●品種別施用時期と施用量の基準

幼穂を確認すると同時に、水稻の葉の色を葉色板等で判断していただき、施用量、施用時期を調整してください。葉色が基準値より濃い場合、倒伏しやすい品種（コシヒカリ、秋の詩、滋賀羽二重糯）では1週間遅らせて10～15kgを1回で、キヌヒカリは、1週間遅らせて15～20kgを1回で、日本晴は、2～3日遅らせて、20～30kgを1回で施用して下さい。

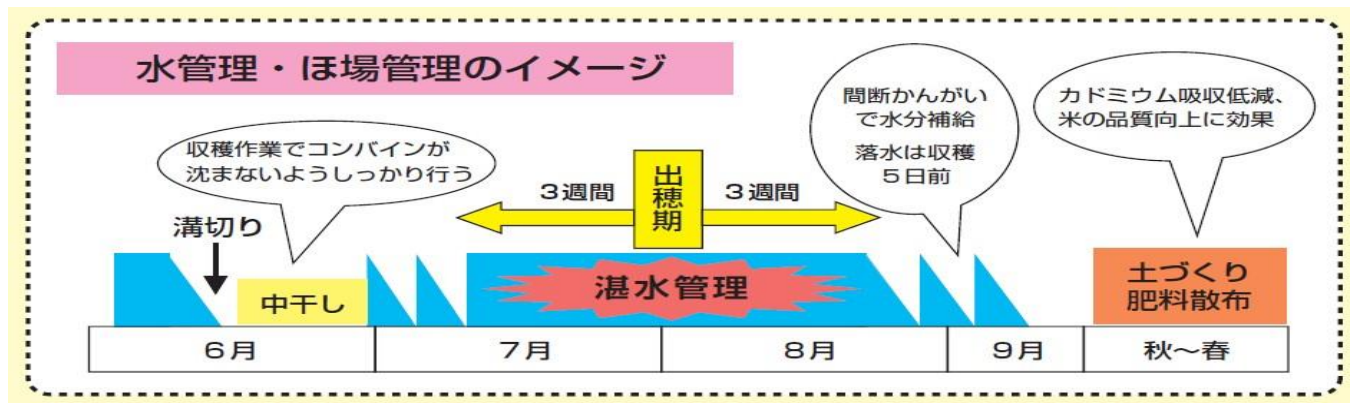
2、水管理（中干しは6月中まで！）

幼穂形成期から出穂期にかけて、吸水量は最も盛んになります。反面、節間伸長が始まる頃から新しい根の発達が少なくなり、根の機能も衰えてきます。水不足は幼穂の発育が劣り、籾数が減ったり、穂いもちにかかりやすくなりますので注意して下さい。

★カドミウム吸収抑制対策

カドミウムは、田んぼに水を張って土壌を酸素不足の状態（還元状態）にすると、カドミウムは土壌中の硫黄と結合して根から吸収されにくい状態となります。具体的には、出穂前3週間から出穂後3週間の6週間は、水田に水を張った状態を保つことで、水稻が土壌から吸収するカドミウムの量を減らすことができます。

●出穂前後3週間の湛水管理



●品種別湛水期間

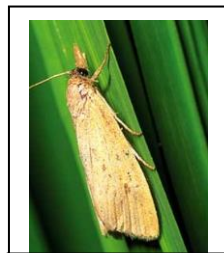
品 種 名	湛 水 期 間
コシヒカリ、キヌヒカリ	穂肥Ⅰ施用後～8月中旬頃まで
日 本 晴、秋 の 詩	穂肥Ⅰ施用後～8月下旬頃まで
滋賀羽二重糯	穂肥Ⅰ施用後～9月上旬頃まで



いもち病



ニカメイチュウ



ニカメイチュウ

3、病虫害防除

(1) いもち病

葉いもち病については、曇りや雨の日が続き、葉の表面の水分が乾かない状態が続くと発病するおそれがあります。水稻移植時に箱施用薬（デジタルコラトップアクタラ箱粒剤）を施用していない場合は、こまめに水田の巡回を行い、早期発見、早期防除に努めましょう。

葉色の濃い圃場や過繁茂の圃場は特に注意をしましょう。発生する条件が続いたときは、薬剤で予防散布をするほうが良いでしょう。予防散布剤として、コラトップ粒剤5があり、多発が予想される葉いもちには、初発10日前くらいの使用が、より防除効果を高めます。

※7月末からの市内一斉防除で散布する薬剤は、いもち病に効果のある成分は含まれていませんのでご注意ください。

(2) ニカメイチュウ

幼虫は年に2回発生し、6月下旬に発生した第1世代幼虫は茎内に侵入し食害し、8月上中旬の第2世代の幼虫による被害は、茎が白穂になり、被害が拡大すると倒伏します。例年ニカメイガの発生が多い地域やニカメイガに効果のある苗箱施薬剤をしていない圃場については注意してください。

(第一世代防除時期 6月10日頃から 第二世代防除時期 8月上旬)

○本田農薬

農薬名	適用病虫害	使用時期（収穫前日数）	10a 使用量	使用方法	使用回数
コラトップ 粒剤 5	いもち病	葉いもち 初発 10 日前～初発時 穂いもち 出穂 30 日前～5 日前まで	3～4 k g	散布	2 回以内
パダン粒剤 4 (毒劇物)	ニカメイチュウ、イネトリス コブノメイガ、アザミヤメ類	収穫 30 日前まで	3～4 k g	散布	6 回以内

(3) カメムシ防除

種類	一斉防除（基準日）		無人ヘリ	
	散布日	早生品種 7月28日 中晩生品種 8月4日	生育に応じて散布	協議会で設定
農薬名	スタークル粒剤	スタークル豆つぶ	スタークル液剤 10	ビーエムエイト スタークルゾル
適用病虫害名	ウカ類、ツマグロヨコバ、イメムシ類	カメムシ類	ウカ類、カメムシ類	カメムシ類・いもち病
10a 使用量	3 kg	250 g	8 倍 800ml	8 倍 800ml
使用時期	収穫 7 日前まで	収穫 7 日前まで	収穫 7 日前まで	収穫 7 日前まで

☆2回の畦畔草刈りでカメムシ防除（一斉防除と合わせて効果抜群！）

カメムシは、圃場に侵入する前に畦畔の雑草の中に生息し増殖します。その後、圃場内に侵入し穂を吸汁し斑点米を生じさせます。そこで、出穂3週間前と出穂期の2回に分けて畦畔の草刈りを実施するとカメムシは畦畔に寄り付きにくくなり、一斉防除と合わせて非常に効果的です。

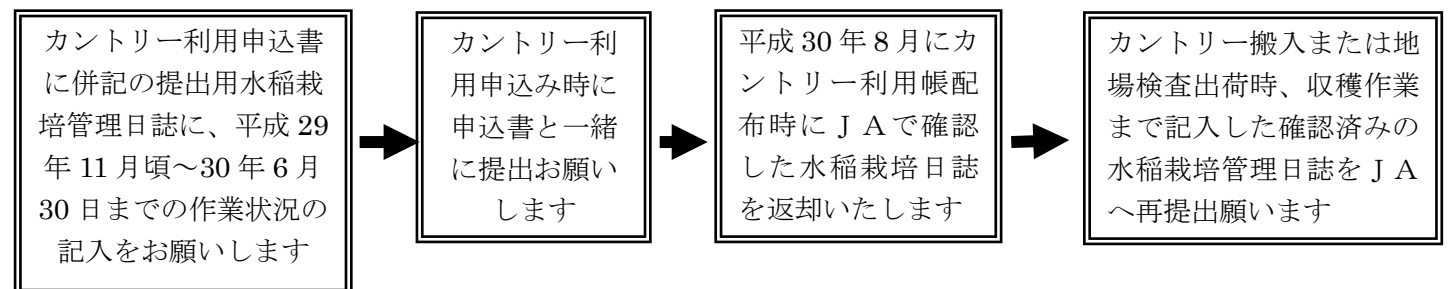


4、農作業中の熱中症にご注意ください

農作業中の熱中症による死亡者数は、毎年20人前後で推移しており、7～8月に70～80代の方が屋外作業を行うときに集中して発生しています。また、昨年は5月の気温が高かったこともあり、ビニールハウス内での作業中に熱中症による死亡事故が発生しています。気象庁の発表によると、昨年同様、3か月（6～8月）予報では全国的に平均気温が高い見込みとされており、今夏も暑熱環境下での農作業中の熱中症対策が重要です。

5、水稻栽培管理日誌について

平成30年産米においても、JA 出荷予定者（カントリー利用者も含む）の方は、カントリー利用申込みの際、カントリー利用申込書に併記の提出用水稻栽培管理日誌に6月30日までの作業状況を記入して提出願います。JA にて種子更新状況、農薬肥料などの使用状況を確認し、添削後返却する予定ですのでご協力お願いいたします。



II、大豆（フクユタカ）

1、播種

播種は出芽・苗立ちを安定させるため、播種深を3cm程度になるように播種機を調整しましょう。また、播種時期が天候不良などにより遅れる場合は播種量を増やすなどの調整をしましょう。

○播種量

播種時期	播種量（10aあたり）	株間（cm）
7月1日～10日	4kg	15～20
7月10日～20日	6kg	15cm以下
20日以降	8kg	TACにご相談ください

※播種方法＝条蒔き、条間70～80cm、中耕作業実施の場合

2、雑草防除

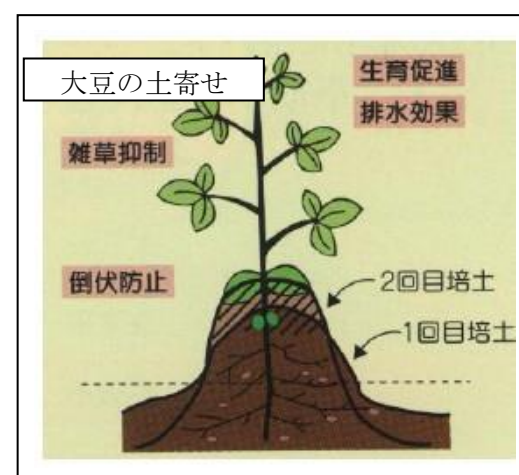
播種後に、クリアターン細粒剤か乳剤を散布し、雑草の発生を抑制することで、初期生育がよくなります。生育中期に雑草が残っている場合はポルトフロアブルで追加除草をすることができます。

○大豆除草剤

農薬名	適用雑草	使用時期 (収穫前日数)	10a使用 量	希釈 水量	使用方法	使用 回数
クリアターン細粒剤F	畑地1年生雑草	播種後出芽前 (雑草発生前)	4～5kg	—	全面土壌散布	1回
クリアターン乳剤	畑地1年生雑草	播種後発芽前 (雑草発生前)	400～800 ml	100 ^{リットル}	全面土壌散布	1回
ポルトフロアブル	畑地1年生イネ科雑草 (スズメノカタビラを除く)	雑草生育期 (イネ科雑草3～10葉期) 但し収穫30日前まで	200～300 ml	100 ^{リットル}	雑草茎葉散布 又は全面散布	1回
大豆バサグラン	畑地1年生イネ科雑草 以外	雑草生育期 (だ이지2葉期～開花前) 但し収穫45日前まで	100～150 ml	100 ^{リットル}	雑草茎葉散布 又は全面散布	1回

3、中耕・培土（土寄せ）

中耕、培土は大豆の初期生育の雑草を抑え、土壌中の通気性をよくして根の発育を促し、倒伏を防止する効果があります。中耕・培土の1回目は、本葉2～3枚の頃に子葉が隠れる程度土を寄せ、2回目は本葉が5枚程度展葉した頃に初生葉が隠れるくらいに土を寄せます。遅くなると根を傷つけ、生育を低下させますので、開花期までに実施するようにして下さい。



4、病虫害防除

開花期すぎから、害虫による葉や莢への食害や病気の発生が増加してきますので、8月20日頃から、さや伸長期にわたり薬剤による防除が必要です。ハスモンヨトウなどの害虫は、発生量が増加すると葉の食害による被害が拡大し、収量が大きく減収する恐れがあるため注意が必要です。